



保育所における行事活動の意義

——新型コロナウイルス感染症 1 年目の実践を中心に

1.

はじめに

2019 年末に発見された新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は、急激に世界各地で感染が拡大した。2020 年 2 月に、全国の小・中・高・特別支援学校の一斉休校措置に関する方針が示された。2020 年 4 月には、日本でも感染拡大が広がり、緊急事態宣言が出された。不要不急の外出をはじめとする様々な行動制限が求められた。多くの学校は 6 月頃まで休校の処置を取ることになった。その後も分散登校や ICT を使用した授業を行うことで、学校への登校を義務付けない対応もなされた。さらに家族や本人等が新型コロナ感染者になると、休校等の措置がとられた。幼稚園・保育園・認定こども園等では、学校と同じように休園となったわけではない。4 月に緊急事態宣言が出されてから、各行政の管轄の方針によって、休園や登園自粛等の措置がとられた。医療従事者やエッセンシャルワーカーと呼ばれる職においては、仕事に行かなければならず、子ども達は保育所等では預かることを求められた。登園自粛の期間、家で過ごす子どももいれば、保育所で過ごす子どももいるという今まで経験したことのない状況であった。その状況の中でも保育士や幼稚園教諭は、日々の保育活動を継続させるために様々な工夫を行いながら、子どもの成長を見守り、健康や安全確保に努めた。

石井（2020）らは、「目の前にいない子ども、保護者の状況に合わせた支援を考えるためには、これまでの保育で培われてきた子ども理解、子育て支援の専門性に加えて、家庭で長時間一緒に過ごすことになった親子の様子を念頭に置いた支援の提供が必要になる」と述べているように、幼稚園・保育所では、様々な面で保育や子育て

支援を継続できるよう取り組みを行っていた。

秀（2010）は、「幼児教育現場において、年中行事は大変重要な位置づけとされている。保育所・幼稚園における保育過程・教育課程においても、行事を位置付けることによって、一年のサイクルを打ち出しているのが現実である。年間を通して子ども達が触れる行事は多種多様であり（中略）行事はそれを経験する子ども達にとっても大きな存在であり、欠かすことの出来ないものである」と述べている。

渡部（2022）は、「新型コロナウイルス感染症の影響により 62.4% の園が行事の中止もしくは今後中止を検討した。または、行事の見直しや見直しの検討については、94.9% の園で行われていた」と記している。

及川（2021）は、COVID-19 拡大後における保育者の困難感を生んでいる背景には、仕事量の増加・例年の保育計画の見直し・今後の保育のねらいと見通し等が大きいと記している。その中でも「行事及びそれに類する活動の実現を模索する保育者の姿は、行事が日本の保育において幼児たちの成長・発達をうながし、また保育のねらいや見通しを考える上でも重要な位置をとってきたことの表れである」と述べている。

本文の中で、COVID-19 の感染拡大の中で、1 年間を通して、保育の中で「行事活動」をどのように行っていたかを明記する。

2.

保育園における「行事」

保育所保育指針 2017 年告示では、身近な環境との関わりに関する領域「環境」の内容に「近隣の生活や季節の行事などに興味関心をもつ」とあり、内容の取扱いに

は、「地域の生活や季節などに触れる際には、社会とのつながりや地域社会の文化への気づきにつながるものであることが望ましい。その際、保育所内外の行事や地域の人々との触れ合いなどを通して行うこと等も配慮すること」とある。

青戸(2019)らは、「保育・教育現場において、子どもの人間形成の基礎を培い、園児の生活全体が豊かなものとなるものの保育の方法の一つとして、行事活動が行われているのである」と明記している。奥山(1997)は、「行事は本来、幼児の生活の節目となり、それまでの生活経験を基に幼児と保育者が共に活動を作り上げる喜びや期待感、日常の活動とは異なる活動の工夫などを経験したり、季節感や伝承文化など、行事でなくては経験できないことが出来る機会である」と述べている。

3.

保育所の行事の実践

COVID-19の感染拡大初年度の保育所での行事の実践方法をまとめる。

- ① COVID-19がなかったそれまでの行事の開催方法
- ② COVID-19の感染拡大初年度の保育所での行事の実践までの流れと方法
- ③ 考察

以上のように、今までの行事開催方法から、COVID-19拡大後、どのように検討し、対応を行っていったのかを記述する。

(1) 入園式

①保育所は4月1日が入園式となる。義務教育等の学校とは違い、4月1日から保護者も仕事が始まる関係から、初年度に行うことになる。新入園時全クラスの子どもとその保護者の方が一堂に会し、全体で職員の紹介や入学にあたっての説明などを行う。保育所に子どもを預けている多くの保護者は仕事をしているため、休みをとって一斉に集まるのが難しい。そこで、入園式の日に入園児や保護者の方との交流や新しい担任との親睦会を開いている。

②集団で集まるのが規制され、密閉された空間に長時間過ごすことへのリスクも挙げられていた。通常通りの実施を行うか、場所を外に移して密閉空間を避けて行うか、日程を延期して行う等様々な方法を提案しながら、職員同士で話し合いを重ねた。

実際に行った方法は、クラスごとに時間をずらして入園式を開催することとした。親子で一緒に登園し、入園式終了後一緒に降園してもらうこととした。職員全員の紹介や、保育所での過ごし方や連絡帳の使い方等、細かい連絡事項を直接伝えることが出来た。

全ての学年を入れ替え制にしたことで、担任のクラス以外の場面では、他の職員が誘導や案内等を行うことが出来、スムーズに実施することが出来た。クラスの子どもと保護者の方々の自己紹介や話をする時間も作ることが出来、保護者同士の交流の場とすることも出来た。

③この時、義務教育の学校は休校となり、入学式等も自粛、延期となり、再開の見込みが立たないという状況の中だった。保育所は、休園対象には含まれていなかった。通常通り、新入園児を迎え、保育を開始することが出来たことは、職員にとっては喜ばしいことだった。保護者の方もCOVID-19という未知の感染症に対しては、不安な様子も見られたが、保育職員や同じクラスの子どもや保護者の方々と顔を合わせ、話をしながら顔がほころぶ様子だった。

保育所の入園式とは、はじめて子どもたちが社会の場に出る、保護者の方々が子どもを自身の元から外の世界へ出すという一大行事である。保護者が仕事の時間の関係等で、子どもの登降園時間が大きく異なるため、保護者同士の交流時間の確保が難しい。全員が集まる様な場で少しでもコミュニケーションが取れると、その後送り迎えですれ違った時や、どこかで顔を合わせた時に話をする機会を作るきっかけにもなると考える。

(2) 端午の節句

①端午の節句とは、現在「子どもの日」として男女問わず、子どもの成長を祝い、その幸せを願う日とされている。

保育所では、兜やこいのぼりを飾ったり、制作活動を行ったり、こいのぼりの歌を歌ったり、子どもの日とい

う国民の祝日になっていることを感じながら、自身の成長の喜びと親への感謝の気持ちを持てるように取り組む行事となっている。

②保育所の管轄行政から、休園要請が出され、4月中旬から5月下旬ごろまで子ども達が全員お休みの状況になってしまった。

子どもの日に向けて、制作物等を用意していた職員から、子ども達や保護者の方に保育所で行う予定だったのものを知ってもらい、親子で楽しむ時間を少しでも持てるようにという想いを受けた。そこで手紙を作成し、その中制作物に使うシールや画用紙等をいれ、制作の手順を紙に書いた紙を同封し発送をした。「こいのぼり」や「かぶと」等、年齢ごとに作れるものを選び、子どもが出来る範囲で楽しんで取り組めるように配慮した。

③不要不急の外出制限が出る中、例年、街の川などに泳いでいるように飾られるこいのぼりの姿や各家に飾られる屋根より高い場所にいるこいのぼりを見る機会も少なかったように思う。保育所に全く登園できないという状況が続く中で、子ども達と何かをしたいという保育者達の思いが詰まっているものとなった。後日、保護者の方からも「子どもと一緒に作りました」「子どもの日をお祝いしました」等の話を聞くことも出来た。季節行事として、子どもと保育者だけでなく、保護者の方とも関わりをもちながら取り組むことが出来た。

(3) 保育参観

①保育参観は、子ども達がどのように保育園で過ごしているかを保護者の方が見る子事の出来る大切な行事の一つであると認識している。保育参観は、ほとんどの場合が1日で行われることが多い。毎日異なる保護者が保育を見に来ると子ども達も混乱してしまう。保育所では、家では見せない姿を見せることもある。子どもの様々な姿を見ることの出来き、子どもの成長を保育所と保護者が連携して行う為には大切な行事である。

②緊急事態宣言が出された後は、COVID-19感染拡大の防止策として、大人数の集まるイベントの再開は出来ず、行動制限の自粛も続いているような状況だった。感染してしまったら、近所の方々や会社内に噂が広まってしまうという話を聞くこともあり、飲み会等でクラス

ターが発生した場合には報道でも大きく取り上げられていた。保育参観を1度に全員の保護者に来てもらい行くと、100名以上の人が保育所内に集まってしまう。また、クラスごとに行っても、数十名が集まり、クラスターが起きないという保証は出来なかった。保育参観自体を行わないという選択肢もあった。しかし、保育参観を行わないということは、保護者の方との交流の場が一つ減ってしまうことになる。そこで、1日2組限定で、1か月以上をかけて保育参観を実施することとした。子どもは通常通り登園し、保護者の方は、午前10時ごろから保育所に来て、2階の教室から、園庭での様子をそっと覗いたり、クラスの窓から覗いたり、時には園庭からクラスの中を見たりした。保護者の方も協力的で、子どもに見つかってしまうと帰りたいたいと言い出し、泣いてしまうのではないかと、両親で楽しそうに隠れながら、子どもの姿を見守る様子が印象的だった。

③今回の取り組みにおいては、子どもに保護者の姿が見えないことによって、子どもがいつもと違う状況を感じることがなく、保育所での普段の様子を保護者が見ることが出来たと考える。保護者が自分の子の保育所での様子をスマホで撮影する姿が多く見られた。普段の保育参観だと、子どもの姿を撮影するのは難しい。しかし、この方法で行うことによって、撮影が可能にあり、祖父母の方にも動画で見せることが出来るとの話も聞くことができた。COVID-19の感染拡大によって、作り出すことのできた新しい保育参観の方法ではないかと感じた。

(4) 七夕

①七夕は、七夕の伝説が由来となり、織姫と彦星が年に一度だけ会える日として、願い事を短冊に書いて笹に飾ると願い事が叶うと言われている。保育所では、七夕飾りを作成したり、願い事を短冊に書いたり、笹に飾ったり、保育の中で行事が楽しめるよう七夕の当日までを過ごす。当日は七夕会を開催し、七夕伝説の由来をパネルシアターや劇等を見て、七夕を楽しむ。

②七夕の行事までの過程は、園の中で行えるものなので、通常通り笹飾りつくりや短冊に願い事を書き、七夕の当日を楽しむような環境構成を行っていた。当日は七夕祭りとして、皆で七夕伝説のパネルシアターを

楽しんだ。

③当日の降園の際、飾っていた笹を各家庭に少しずつ切り取って、子どもの制作した飾りや短冊を飾り、持ち帰るようセットし、保護者の方に、今日の様子と共に渡した。保護者から「今年はどこでも笹を見かけないから嬉しい」「家でもやってみます」という話を伺うことが出来た。例年、七夕祭りは、様々な場所で開催されており、駅や市役所・イベント会場等に笹が飾っており、短冊やペン等が置かれ、自由に書けるスペースもあり、大人から子どもまで幅広い世代の人たちが楽しんでいた。COVID-19の感染拡大防止方法には、直接接​​触や間接接​​触も避けるようになり、手指の消毒から使用したペンや椅子、机等も消毒してから他の人が使用するようになっていった。そのため、セルフサービスで行われていた七夕の短冊に願い事を書くスペースは設けられなくなっていた。外出自粛措置により、学校や仕事もリモートで家から行う人が増え、外出している人の割合も減っていた。各神社や各地区で行われていた七夕祭りも相次いで休止となった。地域として取り組むことは難しいことでも保育所という場所では、例年と変わらずに取り組むことの出来た行事だったように思う。

(5) 運動会

①運動会は、かけっこやダンス、障害物競走などを保護者が見に来て応援してくれる行事となっている。両親や祖父母、兄弟が集まることもある。保護者の方と共に競技を行い、運動の楽しさを親子で共有できる日でもある。

②秋ごろには、COVID-19への対策が進み、イベントやコンサート、花火大会や盆踊り・各地のお祭り等、人が沢山集まる恐れのあるものはすべて休止となっていた。小中学校でも運動会の練習等も行えない状況で、運動会の中止を判断する学校もあった。保育所で開催するためには、まず場所を探すことから始めなければならなかった。園庭はあったが、固定遊具や砂場等もあり、運動会を行う会場には出来なかった。小学校の校庭や体育館も借りるのは難しい状況だった。場所もなく、保護者に来てもらうことも難しくなった時、職員でもう一度運動会の必要性等についても話し合った。また、実施するとしたら、どのように行うのかについても会議を重ね

た。運動会は大変なイメージがあることや子どもや職員に大変な思いをしてまで行う必要があるか等、様々な意見が出た。その中で思いを強く感じたのは「子どもたちの成長のために運動会を開催したい」だった。子どもたちが楽しんで運動会に取り組めるように、どのように準備や練習を行うか。また、保護者の方にも参加してもらうためには、どのような方法があるかなど、問題解決を必要とする課題はあったが、職員同士の思いを一つにすることが出来た。

運動会当日は、通常保育の中で行った。クラスごとに運動会で行いたい競技を決め、準備していた。0歳児は障害物競走、1歳児はダンス、2歳児はダンス、幼児は障害物競走を行った。各クラスの競技は見ても見なくてもいいことにし、子どもの様子に合わせて参加した。0歳児の障害物競走や1歳児のダンスは、他のクラスの子ども達も応援に来てくれて、にぎわっていた。2歳児のダンスの時間は、0歳児はお腹が空いてしまった子が多くなったので、食事の時間にした。2歳児のダンスは衣装を用意しており、1歳児や幼児が練習する様子を見ていたため、一緒になって踊る姿も見られた。幼児は、保育室を3教室使用し、トンネルや衣装替え、ボール運びや平均台等の障害物競走を2人ずつで行った。運動会当日の雰囲気は、勝敗を気にしながらも、楽しさを思う存分表現し、十人十色の子ども達の様子だった。子ども達と職員で、みんなで楽しみながら開催することが出来た。

③保護者の運動会への参加方法は、映像配信とした。今現在(2023年)は、ライブ配信や映像配信は当たり前になってきているが、当時は保育所施設で映像を保護者に届けられるのかは大きな試みであった。職員が保護者のように、子ども一人一人の様子を映し出し、ご家庭で楽しんでもらえるように工夫した。保護者観覧席には出来ない角度からカメラを構え、撮影した映像は、子ども達の一生懸命に取り組んでいる姿を映し出していた。映像を見た保護者の方からは、「子どもたちが楽しそうだった」「実際に参加した気分になって盛り上がった」「祖父母にも映像を送り、子どもの様子を見てもらうことが出来た」等様々な感想があった。もちろん、「直接見たかった」との声もあったが、COVID-19対策をして、運動会を行い、保護者にも参加した気になれる取り組みと

なったことと思う。次年度はライブ配信にしようと職員同士で構想は続いたが、2021年度は小学校の体育館を借りての実施が叶い、それは白紙となった。結果として、COVID-19拡大の1年目だったからこそ、子ども達や保護者にとって何が出来るかを考え、今出来る精一杯のことを行った行事の1つとなった。

(6) 勤労感謝の日

①勤労感謝の日は、働いている全ての人に感謝する日、国民互いに感謝し合う日として1948年に制定された。以前は、新嘗祭として収穫に感謝する祝日だったが、現在は農作物の収穫だけでなく、働く人すべてに感謝する日となっている。保育所では、子ども達に祝日の意味を伝え、感謝の気持ちを伝えられるといいねという話をする程度で、行事として取り入れることはあまりなかった。

②保育所の行事として母の日と父の日を通して、両親に感謝を伝えることが多い。2020年度の保育所はCOVID-19拡大防止のため、休園と登園自粛になっていた期間であり、母の日・父の日共に保育所を通して保護者の方に感謝の気持ちを子ども達から伝えることが出来ていなかったのである。また、現在多種多様な家族の在り方から母の日や父の日を行う際、配慮が必要な子がいると、どのように対応していくか保育者は悩むのである。職員が、勤労感謝の日で、母親、父親、祖父母誰に対しても感謝の気持ちを伝えることが出来るのではないかと話し始めた。子ども達とどんなものをプレゼントすると喜ぶかを話し合い、制作に少しずつ取り組んでいた。0、1歳児は話し合いが難しいため、子ども達の写真や手形足形等が入った制作を考え、子ども達と保育者が協力しながら作りあげていた。2020年度は、子ども達からの感謝の気持ちは、勤労感謝の日に伝えることが出来た。

③母の日や父の日は、保護者の方も少し期待しながらお迎えに来る雰囲気を感じることもある中、勤労感謝の日で子どもから感謝を伝えられるのは、サプライズだったようで保護者の方は驚きながらも喜んでいた。翌日の登園時や連絡帳などで「夫婦で喜びました」「大切に使います」「ずっと飾っておきます」等、嬉しいお言葉も頂いた。

4.

まとめ

2020年度の保育所で行われた行事は、COVID-19の影響によって今までと同じように行えたものと、行えなかったものが存在していた。今まで通り行えなくても、新しい方法を保育者が見いだし、子どもの成長に繋がる様な行事を展開していた。及川(2022)らのCOVID-19パンデミックを保育士が振り返る中で、行事がいつも通り計画することが出来ず行事のねらいや意図を考え直すきっかけになったという声もあった。その中で「行事は日本の公教育の重要な特徴であり、教育活動の成功や秩序維持と密接につながっていると考えられる。行事は、保育・教育活動の節であり、骨格ともいえる機能を担っている」と述べている。

今回のCOVID-19の影響により、保育士が行事について考え直す機会が増え、行事の在り方が見直されていくのではないかと期待する。実際に、行事を見直して実施したものに関しては、今後も続けていきたい内容のものが多くあった。どのような状況にあっても保育者と子どもそして保護者が手を取り合って、子どもの成長にとってより良い保育を日々模索しながら保育が行われている。

参考文献

- 石井正子・木村英美・横山愛(2021)「新型コロナウイルス感染症流行下で、保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか」昭和女子大学現代教育研究所紀要 第6号 pp.117-127
- 秀真一郎(2010)「幼児教育における年中行事からみる多文化教育」吉備国際大学研究紀要(社会福祉学部) 第20号 pp.109-118
- 渡部努(2022)「愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態」岡崎女子大学・岡崎女子短期大学紀要 第55号 pp.111-118
- 及川智博(2021)「COVID-19感染拡大下の保育者に困難感を感じさせていた要因の検討ー有事下の葛藤にみる保育の質の保障ー」社会保育実践研究 第5号 pp.27-37
- 青戸泰子・菊地愛未・田邊資章(2091)「保育・教育現場におけ

る行事活動の意義」人間環境学会紀要 第32号 pp.1-11

奥山順子(1997)「幼稚園と家庭との連携－園行事の実施と幼稚園教育の役割－」秋田大学教育学部教育工学研究報告 第19号 pp.113-124

足立里美(2014)「行事による子どもの成長と検討－学生の幼児期の行事に対する考えと振り返りから－」岐阜聖徳学園大学教育学部紀要 第53号 pp.91-103

及川智博・中島寿宏・岩谷樹・井内聖・吉川和幸・川田学(2022)「保育者達がふり返る“COVID-19パンデミック”の一年目」北海道大学大学院教育学研究院紀要 第140号 pp.117-154

参考文献

文部科学省(2008) 幼稚園教育要領

内閣府・文部科学省・厚生労働省(2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領

厚生労働省(2017) 保育所保育指針

汐見稔幸(2017) 保育所保育指針ハンドブック 2017年告示版